武庫川流域委員会
委員長　松本誠様

委員　酒井秀幸

意見書

三たび武庫川ダム建設について

第９２回運営委員会に提出された参考資料ー２武庫川ダム建設事業の位置づけについてとして県の見解が述べられており、県当局と委員会の間に齟齬があるのではないかという疑問に答えられている。

私たちは、およそ１００回ちかい運営委員会を重ね、議事進行もたびたび渋滞し委員の苛立ちや、時間不足による問題点の不消化による先送りなど根本的な問題について見解の相違があり、共通認識を欠いたままの議事進行に齟齬を生じる原因があると考えます。

道に迷ったら振り出しへ戻れと言います。急ぐ道ですが今一度スタート時点に立ち返って議事進行の経過を検証したいと思います。

そもそも武庫川の管理者である兵庫県知事が武庫川流域委員会を立ち上げる決意をされたのは２つの動機があると思います。１つは地球温暖化による気象の変動が激しく近年の水害、洪水被害の実体から現行治水対策には限界があると判断されたこと。もう１つは自然環境の大切さに市民が目覚め武田尾渓谷の景観を何としても保全しようという運動が高まり６万人近い署名を集め知事宛に要望書を時の貝原知事に提出したことなどがその背景にあると思います。

この様に工事実施基本計画の実行には様々な問題を抱えることから新たに改正河川法に基づく基本方針から整備計画の策定に至る一連の河川政策をゼロベースから見直し総合治水の観点から議論することを求められたのだと理解しています。

顧みて私たち委員会はゼロベースの位置づけを議論してスタートしたでしょうか、少なくとも従前の工事実施基本計画以前の状態に立ち戻らねばゼロベースとは言えないのではないか、つまりこれからの治水対策には発想の転換が求められているのです。

従来の河川工学一辺倒では変動の激しい現今の状況に対応し切れないという現実をふまえて総合治水の方策を議論すべきだと思います。膨大なデータと綿密なシュミレーションで固められた数値は貴重な資料ではありますが唯一論ではありません。多様な選択肢の一つであると思います。そして総合治水が本道であると思っています。ただ、私がこだわるのは「新たな洪水調整施設で代替えすることを明確にする必要がある。」という基本高水に対して帳尻合わせのために、ダムの必要性に固執することは既に現実から遊離しておりこじつけの感が否めないと思います。そして知事があえてゼロベースと位置づけられた時点で工事実施計画は消滅しています。この道はいつか来た道という歌がありますが、以前、立ち往生した道をまた歩き始めようとしていることに気づくべきだと思います。

雨が降るという自然現象、川が溢れるという現実、それが自然現象なのです。科学の力でもって自然現象を制御しようとすること自体、逆に自然からのしっぺ返しに会うことになると思われます。むしろ自然の中で生かされているという自覚から自然と共生する道を探ることが総合治水の考え方の基本であると考えています。武庫川水系の圏域に降った雨は圏域に居住する人間が運命の共同体として自覚し、それぞれが可能で有効な貯留施設や

2009.12. 9 11:32 P. 2

流出抑制の具体策を議論して整備計画を策定することが治水対策の本道であると考えます。

また当局の指摘される武庫川ダムは基本方針のなかの選択肢のなかに組み込まれていると云うことですが基本方針は１００年のスパンで考えて選択肢に加えたのは国交省の査定の難易を考慮したものであって実現に当たっては優先順位を低くして時を稼ぐうち脱ダムの風潮が世界の主流になるであろうという予測から記載したもので整備計画の２０～３０年スパンでは武庫川ダムを排除しようというもくろみがあった事を記しておきたい。

余談ながら、かって私は奈良県吉野側にかかる大滝ダムを視察した。現場は巨大なモニュメントが建ち広大な架設工事が進行中であった。その中で立ち退きを渋る住民に対してスピーカーで早期立ち退きを迫る光景もあった。当日夜のミーティングに兵庫からは武庫川ダム、大阪からは安威川ダムの反対運動の状況を報告した記憶がありますが２日間行動を共にした政治家が京都府出身の前原誠司氏であったことが鮮明によみがえってくるのです。

2009.12. 9 11:32 P. 3